Федоръ Волковскій

ドストエフスキー全集
5

地下生活者の手記

クロコディール(鰐)

賭博者

永遠の夫

小沼文彦 訳

筑摩書房 刊

ドストエフスキー全集　第5巻　　¥ 1,400

昭和43年10月25日　初版第1刷発行

訳　者　小沼文彦

発行者　竹之内静雄

発行所　株式会社　筑摩書房

東京都千代田区神田小川町2—8
振替東京 4123 電話東京 (291) 7651～5
郵便番号 101—91

CS 77105

目次

地下生活者の手記　五
第一部　地下生活　七
第二部　ぼたん雪に寄せて　三七
クロコディール（鰐）　二一
賭博者　一四七
永遠の夫　二八九
一　ヴェリチャニーノフ　二九一
二　帽子に喪章をつけた紳士　二九七
三　パーヴェル・パーヴロヴィッチ　トルソーツキー　三〇七

四　妻と夫と情夫　三六
五　リーザ　三三
六　閑人の新しい妄想　三三
七　夫と情夫が接吻をかわす　三九
八　リーザの病気　三四〇
九　幽霊　三五
十　墓地で　三六三
十一　パーヴェル・パーヴロヴィッチの結婚　三九
十二　ザフレービニンの家で　三八
十三　どちらが余計に　三七
十四　サーシェンカとナージェンカ　四〇四
十五　清算　四二
十六　分析　四一〇

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

十七　永遠の夫　四二八
訳　注　四三七
あとがき　四四三

地下生活者の手記

第一部　地下生活

この手記の筆者も、また「手記」そのものも、虚構のものであることは言うまでもない。だがそれにもかかわらず、この手記の筆者のような人間は、一般にわれわれの社会がその影響のもとに構成されている、いろいろの事情を考慮にいれて見るならば、単にわれわれの社会に存在しうるばかりではなく、むしろ当然存在すべきはずのものである。私はあまり遠くない過去の時代に存在していた性格のひとつを、普通よりもわかりやすく、公衆の面前にお目通りさせたかったのである。それは――いまだに生きながらえている世代の代表者のひとりである。「地下生活」と題するこの断章において、この人物はまず自己を紹介し、その見解を披瀝し、また同時に彼がわれわれのあいだに姿を現わした、また現わさざるを得なかった理由を、明らかにしようとしているかのようである。だがそれにつづく断章に見られるものこそ、その生涯におけるある出来ごとについての、この人物の正真正銘の「手記」である。

フョードル・ドストエフスキー

一

私は病身な男だ……。私は意地のわるい男だ。私はこれっぽっちも魅力のない男だ。私はどうも肝臓がわるいのだと思う。と言っても私は、自分の病気のことはさっぱりわからないし、いったいどこがいけないのかもはっきりわからないくらいだ。私は医術や医者を尊敬してはいるが、現在医者にかかってもいないし、これまでだって一度もお世話になったことはない。おまけに私は極端なくらい迷信家だときている。つまり、医術などというものを尊敬するくらい迷信家なのだ。(私は十分に教育を受けていて迷信家などにはならないはずなのだが、それでもやはり私は迷信家なのである)。ところがどういたしまして、私が医者にかかりたくないのは私が意地っぱりだからなのだ。現にこれなんかも、おそらく、諸君にはわかっていただけないにちがいない。しかし、私にはよくわかっているのだから仕方あるまい。もっともこの場合、私はいったい誰に向かって自分の癪癪を叩きつけているのか、そのへんのことは私にももちろんうまく説明はできない。私が医者になんかかからないといくら頑張ってみたところで、そんなことでは医者連をちっとも「いためつける」ことにならないことは、私もよく心得ている。いくらそんなことをしてみても迷惑をこうむるのは自分ひとりで、ほかの誰でもないということは、誰よりもよく承知している。だがいずれにしても、私が医者のお世話にならないのは、自分の意地を通すためなのだ。肝臓がわるいのならわるいで結構、なあにかまうもんか、もっともっとわるくなるがいい！

私はもうずっと前からこんな生活をつづけている――かれこれ二十年にもなるだろうか。私はいま四十歳だ。前には勤めていたこともあるが、いまはどこにも勤めていない。私は意地のわるい役人だった。私は態度が粗暴で、しかもそうすることに満足感をいだいていた。なにしろ賄賂は取らなかったのだから、つまりそれくらいの報酬は当然受けてもいいだろうというわけだった。(まずい洒落だが、私はこれを消さないことにする。これを書いたときには、なかなか辛辣なもの

になりそうな気がしたのだが、いまこうしてできあがったものを見ると、なんのことはないただ醜悪なからいばりがしてみたかったにすぎないことがわかる――だが、わざと消すのはやめにしておく！）私の陣取っているデスクのそばに、請願人どもがいろいろな問い合わせにやってくると――私は歯ぎしりをして連中をどなりつけ、うまいぐあいに誰かしらをこっぴどい目にあわせることができたときなぞは、抑えきれない満足を感じたものである。しかもそれがほとんどいつもうまくいったものだった。連中の大部分は臆病なやつばかりだった。先刻ご承知のように――それが請願人というものである。ところで、そうした気取り屋連のなかで、とりわけ我慢のならなかったのはひとりの将校だった。この男はいっこうにかぶとを脱ごうとせず、いやになるくらいサーベルをがちゃがちゃいわせるのだ。このサーベルのことで、私はそいつと一年半もわたりあったものだ。だが、勝負はついに私の勝ちに終わった。そいつはがちゃがちゃいわせるのをやめてしまった。もっとも、これは私がまだ若かった時分の出来ごとである。ところで、諸君、私の癇癪のいちばん肝心のポイントがはたしてどこにあったか、それを諸君はご存じだろうか？　それはほかでもない、すべてはつぎの点にあったのだ。つまり、私が単に意地のわるい男どころか、胸に恨みをいだいた男でさえなく、ただなんの役にもたたないのにいたずらに雀どもを驚かし、それでやっと心を慰めているにすぎないのだということを、それこそ一分一秒の休みもなく、もっともはげしく癇癪玉を破裂させたその瞬間ですらも、自分の胸に自覚して羞恥の念にかられるという、その点にこそせんじつめればもっとも大きな醜悪さがあったのである。かりに口から泡を吹くほど腹を立てていたにしろ、まあ人形でもひとつ持ってきてみるがいい、砂糖のはいったお茶でもひとつふるまってみるがいい、私はきっとおとなしくなってしまうにちがいないのだ。いやそれどころか、たとえあとになって、間違いなく、われとわが身の不甲斐なさに歯ぎしりして、恥ずかしさのあまり何カ月も何カ月も不眠症に悩まされるに決まっていても、心から感動してしまうに相違ないのだ。それが私の身についた癖なのだからどうにも仕方がない。

さきほど私は意地のわるい役人だったと言ったが、実はあれは嘘をついたのだ。意地になってわざと嘘をついたのだ。私は請願人や将校を相手にただわるふざけをしたまでの話で、そのじつ一度だって意地のわるい男になれたことなんかありはしない。それどころか、それとはまったく反対な要素が私の内部に実に多く存在していることを、ひっきりなしに自覚していたものである。私はそれが、その反対な要素が私の内部にうようよとうごめいているのを感じていたのだ。私はそいつが一生のあいだうごめきつづけて、なんとかして内部から外へ飛び出そうとしていたのを、ちゃんと承知していたが、しかし私はそいつらを外へは出させなかった、決して出させはしなかった、わざと外へ出させはしなかったのだ。私はそいつらに苦しめられて恥ずかしくなったくらいだ、痙攣を起こさせられたくらいなのだ、そして――私は結局そいつらにすっかり飽き飽きしてしまった、まったくうんざりしてしまったのだ！　ところで諸君、諸君にはいま私がなにごとかを諸君の前で悔悟し、諸君になにごとかの赦しでも願っているように思われるのではないだろうか？……。きっとそう思われるに相違ないと私は信ずる……。もっとも、私は断言してはばからないが、たとえそう思われようとどうしようと、そんなことは私にとってはどうせ同じことなのだ……。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

私は意地悪になれなかったばかりか、結局、なにものにもなれなかった。悪人にも、善人にも、卑劣漢にも、正直者にも、英雄にも、虫けらにもなれなかった。いまに及んでもなお私は、自分の片隅に逼塞して、結局、利口な人間は本気でなにものかになりきることはできない、なにものかになり得るのはただ馬鹿だけだという、意地のわるい、なんの役にもたたない気休めで自分の心をいらだたせながら生きながらえている始末である。いやまったく、十九世紀の人間は道徳的に言っても、特に無性格な存在であるべき義務を負っているのだ。性格を有する人間は、つまり活動家は――まず第一に枠にはめられたつまらない存在でなければならない。これが四十年来の私の持論である。私はいま四十歳だが、しかし四十歳と言えば――これはもう定命だ。たいへんな老齢と言わざるを得ない。四十年以上も生き延びるなんて不作法だ、卑劣だ、不道徳なことだ。四十年以上も生き延びるのは、いったいどんなやつだ？　まじめに、正直に答えてみるがいい。どんなやつが生きるか、それではこの私が言ってやろう。生きるのは馬鹿と碌でなしばかりじゃないか。私はあらゆる老人どもに、世の尊敬を受けている、髪に霜をいただいた芳香馥郁たる老人どもに、面と向かってそう言ってやる！　世間のやつらに面と向かってそう言ってやるのだ！　私にはそう言う権利があるのだ。というわけはほかでもない、この私は六十までも生き延びるつもりだからだ。私は七十までも生き延びてやる！　八十までも生き抜いてやるのだ！……。しかしちょっと待ってくれ！　ここらでちょっとひと息つかしてくれたまえ……。

ところで諸君、諸君はおそらく、私は諸君を笑わせるつもりなのだと思っておられることだろう？　それならばまたしてもとんだ見当ちがいというものだ。私は諸君が考えておられるような、あるいは、ひょっとすると考えておられるかもしれないような、そんな底抜けに快活な男ではさらさらない。もっとも、こうした私の饒舌に向かっ腹を立てられた諸君が（ところで諸君は向かっ腹を立てておられるにちがいないと、私はもうちゃんと感じているのだ）、それではお前はいったい何者だ、とたずねる気になられたとしたら――私は諸君にこうお答えしよう、私は一個の八等文官（帝制ロシヤの文官は十四階級の官等にわかれていた）にすぎないと。私はなにものかを口に入れんがために（ただそのためにのみ）職についていたのであるが、去年遠い親戚のひとりが遺言によって六千ルーブリの金を私にのこしてくれたので、私は待ってましたとばかりに職を退いて、この片隅に引きこもってしまったのである。私は前からこの片隅に住んでいたのであるが、今度はこの一隅に引きこもってしまったのだ。私の部屋はみすぼらしいとんでもない代物で、町はずれにある。私のところの女中は――年寄りの、田舎婆で、馬鹿のために意地がわるく、おまけにいつでもいやな臭いをぷんぷんただよわせている。ペテルブルクの気候は私の健康に害を与えるだろうし、また私の貧弱な資力ではペテルブルク住まいは非常に高いものにつく、と私はよく人に言われる。だがそんなことは百も承知だ。そんなことを口にする経験をつんだこざかしい忠告者や、もっともらしい顔をした連中よりもずっとよく心得ているくらいだ。だが私はこうしてペテルブルクに踏みとどまっている、どんなことがあってもこのペテルブルクから出て行くもんか！　私が出て行かないのは……。ちぇっ！　出て行こうと出て行くまいと、そんなことはまったくどっちでもいいことじゃないか。

しかしそれはともかくとして、れっきとした人間が、いちばん大きな満足をいだいて話のできることといったら、いったいどんなことだ

ろう？

答え――自分自身のことである。

さて、それでは私も自分自身のことを話すことにしようか。

二

さて諸君、諸君が聞きたかろうと、聞きたくなかろうと、私はこれからなぜ私が虫けらにすらなれなかったかという理由を、諸君にお話ししたいと思う。大真面目で言うのだが、私はいままでにいったい何度虫けらになりたいと思ったかしれやしない。しかしながら私はそれにすら値しない人間だったのである。誓って言うが、諸君、あまりにも意識しすぎるということは――病的である、正真正銘の、完全な病気である。人間の日常生活にとっては、月並な人間的意識だけでも十分すぎるくらい十分なのだ。つまり、この不仕合わせな十九世紀に生まれ合わせ、しかもそればかりでなく、この地球上でもっとも抽象的な、もっとも人為的な都市であるペテルブルクに住むという、二重の不幸を背負い込んでいる有識者に与えられた意識量の、せいぜい半分か四分の一もあればそれで十分なのだ。（都市には人為的なものと、非人為的なものとがある）。たとえて言えば、なんでもずばずばやってのける人物とか活動家とか呼ばれる連中が、それによって生活の資を得ている程度の意識があれば、それでまったく十分なのである。ところでなんなら賭をしてもいいが、諸君は私がこんなことを書いているのは、活動家を皮肉ろうとしてからいばりをするためだ、しかも悪趣味なからいばりで、例の将校のようにサーベルをがちゃつかせているのだと考えておられるにちがいない。しかし諸君、どこにいったい自分の病気をひけらかし、しかもそれを虚勢をはる種につかう者がいるだろうか？

だが私はなにを言ってるのだろう？――現にみんながそれをやってるじゃないか、みんな自分の病気をひけらかしているじゃないか。あるいは私などは、そのもっともはなはだしいものであるかもしれない。だが議論はよしにしよう。私の反駁はとてつもないものだから。しかしいずれにしても私は、単に意識の過剰ばかりではなく、たとえどんなものであろうと意識というものは――病気である、と固く信じて疑わない。私はそれを主張して譲らない。だがこの問題もしばらくやめにしておこう。ところでひとつお答え願いたい、いったいどういう理由で私は、まるでわざとのように、ほかならぬあの瞬間、そうだ、一時われわれのあいだでよく言われた「あらゆる美しく、しかもいと高きもの」のあらゆる微妙なニュアンスを意識するもっとも快適な状態にある、ほかならぬその瞬間に、それを意識するどころか、かえってあのような醜悪な行為をしでかすことになったのだろうか？　あのような行為を……まあ、ひとくちに言えば、あるいはみんながやっていることかもしれないが、私にとってはまるでわざとのように、そんなことは決してやってはいけないといちばん意識しているその瞬間に、やってのけることになったのはいったいなぜだろうか？　私が善だとか、例の「美しく、しかもいと高きもの」だとかを意識すればするほど、私はますます深く自分の泥沼にはまりこみ、ますます完全に足掻きが取れなくなってしまうのだ。しかもなによりも肝心なのは、それが私にあってはすべて偶然に起こるのではなく、まるでそうなるのが当然のことのように起こることなのである。まるでそれこそ私のいちばん正常な状態で、決して病気でもなければ変態でもないらしいので、ついには、こうした変態と戦おうなどという気持ちは姿を消してしま

うのだ。それで結局私は、これがたぶん私の正常な状態なのかもしれないと、あやうく信じ込んでしまうところだった（ひょっとすると、実際にそう信じ込んでいたのかもしれない）。しかしはじめのうちは、最初のころは、こうした戦いにどれくらい苦痛を味わわされたかしれやしない！　私はほかの連中にもそんな経験があるとは信じなかったので、その後もずっとまるで秘密かなにかのように、そっと自分の胸に秘めかくしていたものである。私はそれを恥ずかしく思った（いや、ことによると、いまでもそれを恥ずかしいと思っているのかもしれない）。そしてついには、なにか秘密めかしい、正常でない、卑しい快楽めいたものを感じるようになってしまった。どうかすると、胸のわるくなるようなペテルブルクの夜更けに自分の侘び住まいに戻ってくると、ああ、きょうもまた醜悪なことをしてしまった、だが、やってしまったことはもうどうにも取り返しがつかない、と夢中になって反省し、胸の中でひそかに、そんなことをやってしまった自分を責めさいなみ、われとわが身を鋸びきにし、完膚なきまでにやっつけることがよくあったものである。するとその苦しみは、やがて、なにかしれない恥ずべき、いまわしい、うっとりとした感じに変わっていき、ついには――決定的な、間違いのない快楽に変わってしまうのだった！　そうだ、快楽である、快楽なのだ！　私はそう主張して譲らない。私がこんなことを言い出したのも、実はほかの連中にもこうした快楽を味わうことがあるかどうか、それをはっきりと知りたいからなのだ。ひとこと説明を付け加えておく。この場合の快感は、ほかでもない、あまりにもはっきりと自己の屈辱を意識するところからくるのである。つまり、自分は最後の土壇場まで行ってしまった、それはいやなことだが、そうかと言って、ほかにはどうにもしようがない、もう自分には逃げ路がないのだ、と言っていまさら別人になれるはずもない、またよしんば、なにかほかのものになり得る時間の余裕と信念があったにしても、おそらく当人自身そんな変貌は望まないに相違ない、また仮りにそれを望んだところで、そのままなにごとにも手をつけないにちがいない、なぜならば、実際のところ、変わるにしても、おそらく変わるべき対象がないに相違ないからだ、というようなことをすでに自分自身はっきりと感じているところから生ずるのである。しかしながらせんじつめたいちばん肝心な点は、これらのことがすべて強化された自意識の正常で根本的な法則と、それらの法則から直接にほとばしり出る惰力によって生ずるということである。したがってこの場合、なにものかに変貌をとげるとげないの問題ばかりではなく、なんのことはない、なにをしようにも手も足も出ないというわけなのだ。たとえて言えば、強化された自意識の結果として、もしも本人が自分は本当に卑劣漢だと感じているならば、卑劣漢もまた正しい、それが卑劣漢にとっては慰めにもなるのだということになる。しかしもう結構だ……。ちぇっ、さんざんくだらないことをしゃべりまくったが、なにをいったい説明したというのだ？　これでその快楽がどう説明されたというのだ？　しかし私は説明してみせる。私はどうあっても最後の結論を出してみせる！　私がペンを手にしたのもつまりはそのためではないか……。

たとえば、私はおそろしく自負心が強い。まるで佝僂か侏儒のように、疑ぐり深く怒りっぽい。しかしそれにもかかわらず、仮りに誰かに平手打ちをくわせられるようなことがあったにしても、ひょっとすると、それすらも私にとっては喜びであるかもしれない瞬間が、私にはよくあったのである。真面目な話、そんな場合にもおそらく私は私

なりの快感を見出すことができたにちがいないのだ――もちろん、それは絶望の快感であるにはちがいないが、しかし絶望の中にもこの上なくはげしい、灼けつくような快感があるものなのだ。取りわけ、どうにも逃れようのない自分の立場をひどく痛烈に意識しているときなぞはまた格別である。つまりこの平手打ちの場合などは――そうだ、この場合には面目を丸つぶしにされてしまったという意識が重くのしかかってくるのだ。しかしどんなに考えてみても、いちばん肝心なことは、いずれにしても私がいかなる場合でもつねにまっさきに悪者になってしまう、しかもなによりも癪にさわるのは、なんの罪もないのに、いわゆる自然の法則によって悪者になってしまうということなのである。第一、私が周囲の誰よりも利口だと自認していた、そしてどうかすると、諸君はどう考えられるかしれないが、それをきまりわるく思うことがあるくらいだった。すくなくとも私は一生のあいだ、なんとなくずっとそっぽを向いているような具合いで、一度だって人の顔をまともに見ることはできなかったのである)。それからもうひとついけないのは、仮りに私が寛仁大度の持ち主だったにしろ、それがなんの役にも立たないものだという意識から、かえって余計に苦しい思いをするばかりだという点である。おそらく私はその寛仁大度の心から、なにひとつ仕出かすことができないにちがいないのだ。だいいち相手を赦すなんてとんでもない、なぜならば無礼者が私をなぐったのは、ことによると、自然の法則によったことかもしれないじゃないか。ところで自然の法則を赦すなんてことはてんでできない相談であるからである。また、それをあっさり忘れてしまうなんてこともできはしない、それが自然の法則とはいいながら、やはり癪にさわることだからである。最後に、仮りに私は決して寛仁大度にはなるまいと心を決め、逆に無礼者に仕返しをしてやろうと望んだにしても、結局、誰に対してもなにひとつ仕返しなんかできないに相違ない。たとえ一歩を譲って、仮りにそれが可能であっても、おそらくなにごとかを決行しようなどというふんぎりはつきそうにもないからである。ではどうしてそのふんぎりがつかないのか？　その点について、私は特に一言しておきたい。

三

自分の怨みをはらしたり、あるいは一般に自己の主張を通すことのできる人間は――たとえば、どんなふうにしてそんな気持ちになるものだろうか？　思うにそうした人間は、そういう復讐の念にかられるやいなや、その瞬間、彼らの全存在にはその感情以外のものはなにひとつ残らなくなってしまうにちがいないのだ。そういう男は、まるでたけりたった牡牛のように、角をぐっと下に傾けて、まっしぐらに目標に向かって突進する。そこで彼を引きとめることのできるものはただ壁ばかりということになる。(ついでに言っておくが、こういう連中、つまり直情的とか活動家とか言われる連中は、壁にぶつかると、あっさりと手を上げてしまうのである。この連中にとって壁は――たとえばわれわれのような思索する人間、したがってなんにもしない人間が考えるように、避けるものでもなければ、また途中から引き返す口実でもないのである。われわれの仲間はそんな口実など普通は自分でも信じていないくせに、実はどんなときでもそれが嬉しくてたまらないものなのだ。ところがどうして、この連中ときたら真正直にあっさりと手を上げてしまう。彼らにとって壁はなにか心の安まるような、

精神的な解決を与える、そして決定的な、さらにおそらく、神秘的とさえ言えるようなものかを持っているのだ……。だが壁の話はまたあとにしよう)。さて、こうした直情的な人物こそ私は本当の、正常な人間だと考える、これこそほかならぬやさしい慈母のような自然が、好意をいだいてこの地上に生み落とすに際して、まさにかくあれかしと望んだ人間なのだ。私はそういう人間を見ると、癪にさわるほどうらやましくてならない。そういう人間は頭がにぶい、その点については私もあえて争わない。しかし、ことによると、正常な人間というものはもともと頭がにぶいはずのものなのかもしれない。その理由は諸君もご存じだろう。ひょっとすると、それはきわめて美しいことでさえあるのかもしれない。ところで私がこの、いわば疑惑とも言うべきものをいよいよ深く信じるようになったのは、仮りに正常な人間のアンチ・テーゼ、つまり、自意識の強烈な、もちろん自然のふところからではなく蒸溜器から生まれ出たような人間を例にひくならば(こうなってはもうほとんど神秘主義も同然であるが、しかし諸君、私はそんなことも思ってみるのだ)、こうした蒸溜器から生まれ出たような人間が、どうかした拍子にこのアンチ・テーゼの前にすっかりかぶとを脱いでしまい、強烈な自意識を持っているにもかかわらず、あっさりと自分を二十日鼠であると考え、人間であるとは考えなくなることがあるからなのである。なるほどそれは強烈な意識を持つ二十日鼠であるかもしれないが、しかし要するに鼠は鼠である。ところがこちらは人間であるから、したがって云々ということになる。しかも肝心なのは、彼が自分で、勝手に自分を二十日鼠であると考えているだけで、誰もそんなことを頼んだものはいないということなのだ。これは重要な点である。そこで今度はこの二十日鼠の行動ぶりを見てみよう。仮りに、たとえばまあ、この二十日鼠も侮辱を受けて(もっともこいつはほとんどしょっちゅう侮辱を受けてばかりいるが)、やっぱり復讐の念にかられているものと仮定する。その心の中には l'homme de la nature et de la vérité (自然と真理の人) の場合よりも、さらにもっともっと憎悪の念がつもりにつもっているかもしれない。そこには侮辱を与えた者に対して同じように悪をもって報いようとする醜悪で、低俗な欲望が、l'homme de la nature et de la vérité の場合よりも、もっといやらしく牙をむいているのかもしれないのだ。と言うのも、l'homme de la nature et de la vérité は、生まれついての愚鈍さのために、自分の復讐を頭からあっさり正当なものと考えているからである。ところが二十日鼠は、強烈な自意識のおかげで、その正当性をたちまち否定してしまうのだ。そして結局は、直接行動、復讐行為にまで走ってしまうのである。不幸な二十日鼠は、当初のひとつの醜悪行為のほかに、早くもそのあいだに自分の周囲に、種々の疑問や疑惑という形で、それとは別の無数の汚らわしいものを積み上げてしまう。こうして無数の未解決の問題をひとつの疑問にまとめてしまうので、心ならずもそのまわりにはなにか宿命的とも言うべき濁り酒のようなものがたまってくることになる。それは鼠自身の疑惑や、心の動揺や、さらにはまた、裁判官か独裁者という恰好でしかつめらしく立ちふさがって、思いきり大きな声で嘲笑をあびせかけている、思ったことをずばずばやってのける活動家たちの口から飛び散る唾などからできあがっている、悪臭ふんぷんとしたどぶ泥のようなものである。そうなると、もちろんのこと、二十日鼠はすべてをあきらめたように手を振って、自分でも信じていない見せかけだけの軽蔑の薄笑いを浮かべて、自分の穴へこそこそともぐり込むよりほか手はないのである。

そしてそこで、胸糞のわるくなるような、悪臭のたちこめた地下室で、侮辱を受け、なぐりつけられ、笑いとばされたわが二十日鼠の先生は、さっそく冷たい、毒々しい、しかも、これがいちばん肝心なことであるが、永遠に終わることのない憎悪に身をひたすことになる。おそらく四十年間もぶっつづけに自分の受けた侮辱を、最後の最後の、いちばん恥ずかしいごく微細な点までもいちいち思い起こし、しかもその際、それよりももっと恥ずべき詳細な描写を自分で勝手にそのたびごとに付け加えては、自分の妄想でこれでもかこれでもかと刺激を与え神経をいらだたせるに相違ない。自分の妄想をわれながら恥ずかしいとは思いながらも、それでもなおありとあらゆることを思い出し、いちいちそれを数え上げ、こんなことだって起こりかねなかったのだという口実のもとに、とてつもないことを考え出して、なにひとつ赦そうとしないにちがいないのだ。それにおそらく、たとえ復讐に手をつけるにしても、なんとなく片手間仕事に、こそこそと、自分はペチカのかげにかくれて、誰にも知らさずにこっそりとやるので、自分に復讐の権利があることも、その復讐の成功もてんで信じてはいないのだ。しかもこうしたあらゆる復讐の試みのために、復讐される相手よりも自分のほうが百倍も苦しむことになり、相手は、おそらく、痛くもかゆくもないに相違ないことを、前もってちゃんと心得ているのだ。死の床に横たわりながら、またしてもありとあらゆることを思い出すわけだが、今度はそれに一生のあいだに積もりにつもった利息までがついているという始末である……。しかしながら、ほかならぬこうした冷酷な、嫌悪すべき絶望と信念が半々に入りまじっているところに、やけくそになって四十年ものあいだ自分を意識的に地下室に生き埋めにしてしまったというところに、無理に創り出してはみたものの、やはり幾分は疑念の残るこうした自分の絶体絶命の立場に、内訌した満たされることのない欲望のこのような毒素の中に、永遠の決意を固めたかと思うと、その一分後にはまたもや後悔にさいなまれる、こうした躊躇逡巡の熱に浮かされたような状態の中にこそ——さきほど私の言ったあの奇妙な楽しみの醍醐味が含まれているのだ。それは実にデリケートで、どうかすると意識などの手に負えないものなので、ちょっとでも頭の働きのにぶい人間はもちろんのこと、単なる太い神経の持ち主でさえも、その片鱗すらつかむことはできまい。「ことによると、まだそのほかにも」と諸君は白い歯を見せて笑いながら「一度も平手打ちをくったことのない人たちにも、おそらくわかるまいよ」と自分の意見を付け加えられることだろう。そしてそれによって、私が、たぶん、一生のあいだにやはり平手打ちをくわされた経験があるので、それでそんな知ったふうなことを言うのだろうということを、婉曲に当てこすられるに相違ない。賭けをしてもいいが、諸君はきっとそう思っているにちがいないのだ。しかし、諸君、どうか安心していただきたい、私は平手打ちなどをくわされたことはない。もっとも、諸君がそれについてどうお考えになろうと、そんなことは私にとってはまったくどうでもいいことである。私は、ひょっとすると、一生のあいだに平手打ちをあまりくわせなかったことを、むしろわれながら残念に思っているほうの口なのかもしれない。しかしもうたくさんだ。諸君にとって非常に興味のあるこのテーマについては、これ以上ひとことも言わないことにする。

それよりも例の楽しみの繊細な味のわからない神経の太い人たちのことを、気を落ちつけて語りつづけることにしよう。こうした紳士連は、時と場合によっては、たとえば、まるで牡牛のように、咽喉も裂

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com